

ACS の診断と治療はどこまで進歩したのか

急性心筋梗塞や不安定狭心症といった疾患を含む概念である急性冠症候群 (acute coronary syndrome ; ACS) の診断・治療は大きく変化しつつある。日常臨床で多く遭遇する疾患でありながら、われわれは ACS の概念そのものも十分定義できておらず、また、その病理像も多様なものであることがわかっている。血行再建術により予後は大幅に改善したとはいえ、今も ACS は予後不良の疾患の一つである。そうであるがゆえに多くの臨床試験が行われ、常に新たなエビデンスが創出されてきている分野となっている。今回の『循環器ジャーナル』では ACS の多くの側面に関してエキスパートの方々に解説いただいた。

まず ACS の基礎知識として、定義、疫学、病理をまとめることとした。時代とともに変遷してきている ACS の疾患概念をどのように見るか。新たな定義の下でわが国での疫学の最新のデータは変化しているのだろうか。ACS の病理の最新知見に関しても一項目を割くこととした。

ACS の診断の項目では、ACS の診断を実際の診断過程に基づき記載いただいた。非侵襲的イメージングの役割については、ACS の診断のみならず、その予測に関しても今後の方向性が示されている。

ACS の治療の中心は冠動脈インターベンションである。しかし、カテ室に入る前のところから ACS の治療は既に始まっている。STEMI, NSTEMI でいかに治療を組み立てるべきか、また、カテ室内でもインターベンション時のイメージングをどのように診療に生かすかなど少し専門的な問題も取り上げた。さらに日常診療で問題となる ACS の鑑別疾患と特殊な病態に関しても項目を割いた。

ACS の治療はカテ室のみで終了するのではない。二次予防に必要な薬剤に関して多くのコントロールバシーと新たな薬剤の選択肢が生まれてきている。抗血小板薬の併用療法は未だに議論的となっているし、脂質異常症の治療薬にも新たな選択肢が登場し、日常臨床でも使用されるようになってきている。糖尿病治療薬の中にも心血管イベントを減少させることが証明された薬剤が登場しており、従来と薬剤選択の位置付けが変わってくる可能性もある。

ACS の非薬物療法も重要な位置付けとなりつつある。例えば心臓リハビリテーションは心血管疾患患者の予後を大幅に改善することもできる治療法であり、さらなる普及が期待される。また、デバイスによる補助循環に関しても項目を割り、補助循環のコントロールバシーと、これから承認されるデバイスについても解説いただいた。

上記のごとく、本特集は、急性期の管理から最終的に二次予防を行うまでの多くのプロセスにおける最新の情報を盛り込んだ非常に意欲的なものとなった。この一冊で、ACS 診断治療の現在の姿を俯瞰することができる内容になったのではないかと自負している。本特集が日常診療の一助となれば幸いである。

北里大学医学部循環器内科学 阿古潤哉